

日本英学史学会中国・四国支部

ニューズレター

No.91

Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter

明治は遠くなり、されど —ご挨拶に代えて—

竹中龍範

皆さまには清々しい新年をお迎えのことと存じます。本年が皆さまにとりまして実り多い一年となることを祈念申し上げますとともに、支部活動の活性化にいつそのご支援とご協力をお願い申し上げます。

本年2018年は、明治元年に当たる1868年からちょうど150周年ということで、明治150年という言い方がなされているようです。しかし、明治の元号を延長して数えた場合、厳密には昨年が明治150年に当たることになります。この混乱は明治100年と言われたときにも見られ、「明治百年記念」の郵便切手が発行されたのは1968(昭和43)年でした。この年紀と周年とを混同することはよく見られますが、元号によるものであれ、西暦であれ、いずれも元年(1年)から始まり、人の満年齢が0歳から始まるのとは異なるわけです。西暦2000年を迎えた折も、いわゆる2000年問題とは別に、これが20世紀の終わりの年なのか、21世紀の最初の年なのかについてひと騒ぎがあったようです。これも西暦の第1世紀が紀元後1年に始まって100年までの100年間であり、したがって、20世紀は1991年から2000年までであると説明してようやく納得してもらえたことがありました。とまれ、その明治150年とされる本年、これを記念する催しなどが何か企画されているのでしょうか。

降る雪や明治は遠くなり、とは中村草田男が1931(昭和6)年に詠んだ有名な俳句ですが、この時からでもすでに90年近い歳月が流れております。してみると、現代と明治との間の距離は遠いなどと言う感覚では捉えられないほどになっているのでしょうか。

しかしながら、この明治という時代こそわが国の歴史上に近代と称される時期の礎を築いたときであり、それは同時に英学の土台が形作られたときでもあります。明治の文明開化が英語、あるいはフランス語、ドイツ語等とおして進められた時代であり、近代日本の出発点となった時代であります。その明治期の英学史研究・英語教育史研究はどこまで進んでいるのでしょうか。国立国会図書館所蔵の図書や雑誌、音源等がデジタル公開されるようになって、かつては資料探しが研究の第一歩であった英学史や英語教育史の研究が、ある意味では、楽に行えるようになりました。しかし、これらが公開されたことによって明治期英学の全貌が見えるようになったわけではありません。ここに欠けている資料をどこに求め、いかに発掘するかも視野に入れておく必要があります。そのうえで、これらを総合的、統一的に分析、解釈することが求められます。明治150年と言われる今年、改めて明治という時代を研究対象とする機運が生まれ、さらなる研究につながることを願っております。

(日本英学史学会中国・四国支部支部長)

<エッセイ>

犬も歩けば棒にあたる

—浦島屋と小泉八雲—

上 杉 進

平成30年は維新後150年、節目の年である。2015年山口県萩の反射炉を含む22の遺産(のち23)で構成された明治日本の産業革命遺産群はユネスコの世界遺産に登録された。そこで遺産群の一つ、明治が現存する三角西港にアクセスした。テンダーにより上陸。

西港は、明治三大築港の一つで、明治20年ムルドル(和蘭人)が設計した。756mの切石積みの埠頭、その背後の道路、建築物も今も整然として明治を残している。ぶらぶら歩く。

“小泉八雲の「夏の日の夢」舞台”と書いてある浦島屋に出くわす。colonial style で、外見は、サモアの R. L. Stevenson の住まいに酷似。木造2階建て、天井は高く板張りのバルコニーは風が吹き抜け、海を眺望できた。八雲も同じ光景を楽しんだに違いない。浦島屋は明治38年に解体、大連へ。その後平成5年に往時の写真をもとに復元し現在に至る。

第五高等学校在任2年目の夏、八雲は長崎へ旅行。7月2日付 B. H. Chamberlain 宛の書簡を参照すると、「7月20日の朝、単身人力車で熊本を発ち百貫港から大阪行き太鼓丸にて翌朝午前3時長崎着。ベルビューホテルに投宿するも熱帯夜、西洋風ホテルで夜を明かすことに耐え兼ね、明午前3時過ぎ退散、大阪汽船金竜丸にて午前9時三角着。旅館浦島屋で休憩後人力車を乗り継ぎ同日夕刻帰宅」とある。八雲の浦島屋滞在はわずか数時間であった。八雲は浦島伝説の由来をめぐる論考と絡め、母ローザとの幼児体験を振り返り「夏の日の夢」の名作を生んだ。—8月28日付けジャパン・メールに初出。

「旅館は極楽、女中さんたちは天女のようにであった」に始まり、「女将は国貞の版画のように美形、声は風鈴のように涼しい」とべた惚れ。自らを浦島、女将は乙姫と見立て、夢幻の世界を楽しみ、文学的自由を謳歌している。女将は山下芳、格別な美人であったという。

Chamberlain を通して『雄略紀』の「浦嶋子」に触れており、節子夫人によると浦島太郎はお気に入りであったそうだ。八雲に先行した Chamberlain のちりめん本浦島太郎は動物愛護・弱者救済が表面に出た教育的なものであった。

八雲版は、浦島は故郷の家の周囲の変貌ぶりに失望し、禁じられていた玉手箱—亀が報恩の心で一年一年を700年間丁寧に畳み込んだ箱—を開けると、一瞬で老翁になる。

八雲は『雄略記』をもとに民間信仰に思いをはせる。その後浦島は鶴に変化し、謡曲「鶴亀」に出てくるあの蓬莱山に舞う。亀は万年の寿命を得る。のち丹後の国に明神となって顕れ、亀と夫婦明神となり衆生を救った。鶴亀はめでたいものの筆頭。素晴らしい話だ。

今回訪れた文化遺産群に、新しい国づくりを志し、献身した明治人の努力に脱帽、感謝である。偶然が重なり、浦島屋で八雲と時差こそあるが同じ体験をしたのは幸運であった。

「先の見えない猪突猛進的な産業化が日本人の楽園をダメにしてしまった」という八雲の指摘。古き良き日本の心を失わないよう、心して日々を送りたい。

平成29年度第2回(通算77回)研究例会報告



香川大学教育学部 631 教室にて

2017年12月9日(土)、香川大学教育学部(香川県高松市)において、本年度第2回(通算第77回)研究例会が開催されました。今回は、香川大学の田村道美先生、竹中龍範先生にご講演をいただきました。お二人の先生には、会場のご準備からご講演まで、大変お世話になりました。篤くお礼申し上げます。

日時：2017年12月9日(土) 13:30 受付開始

会場：香川大学教育学部 631 教室(6号館3階) 〒760-8522 高松市幸町1-1

開会行事(14:00～14:05)

支部長挨拶 竹中 龍範(香川大学)

講演①(14:05～15:15)

日本における *Pride and Prejudice* の受容 一漱石、豊一郎、弥生子を中心に－
田村 道美(香川大学名誉教授)

講演②(15:30～16:40)

英学史・英語教育史研究に魅せられて
竹中 龍範(香川大学)

閉会行事(16:45～17:00)

副支部長挨拶 松岡 博信(安田女子大学)

忘年懇親会(18:00～) 会場：庄や高松駅前店

講演①

「日本における *Pride and Prejudice* の受容 — 漱石、豊一郎、弥生子を中心に —

田村 道美 (香川大学名誉教授)



田村先生は、長年のご研究の成果を踏まえ、日本における英文学作品の受容について英学史的観点からお話くださった。(1)日本に初めて Jane Austen を紹介したのは夏目漱石であった(英国で明治33年11月～12月に *Pride and Prejudice* を含む原書を50冊あまり購入)。(2)また、初めて *Pride and Prejudice* を翻訳したのは漱石の弟子である野上豊一郎であった(大正15年8月)。(3)さらに、その妻の弥生子は『高慢と偏見』を参考に『真知子』を書いたものと考えられる(昭和3年～5年)。これら、明治から昭和にかけて

での Jane Austen と *Pride and Prejudice* をめぐのご研究は、たいへん新鮮かつ刺激的であった。(鉄森令子 記)

【参加者の感想】

◆講演と銘打ってはいるものの、しっかりとした資料調査をなされた上でのご発表に、むしろ研究発表として伺いました。入手の難しい「世界名作大観」の内容見本を発掘されて裏付けをとられるなど、いつもながら、実証性の高いご発表に一々頷きながら聴き入ってしまいました。いつの日か「わが国における Jane Austen 受容史の研究」が単行本として著されることを期待しております。(Dragon)

◆2017年にBank of Englandが新しく発行した、裏側に Jane Austen(1775-1817)の画像が載った£10 polymer noteを1,620円で郵便局から買ってきたと提示(直後に回覧)しながら講演が始まった。漱石が明治11年から12年に購入した原書(books)の一つが Austen の *Pride and Prejudice* で、それを讀んだ彼は「Austen を賞玩し能わざるものは遂に写真の妙味を解し能わざるものなり」と述べ、当時文壇で人気を博していたわけではない Austen をすでに高く評価したことを、漱石・豊一郎・弥栄子に関する資料を基に詳細にお話が展開していった。最後に小説のなかで Darcy の階級意識に基づく傲慢さと Elizabeth の偏見(虚栄心)とを、両人が話し合い克服して結ばれていくこともわかり、まるで読後の安堵の気持ちを味わいました。なお、£10紙幣の Austen の画像の下部に、「I declare after all there is no enjoyment like reading!」とあることも知りました。お話、ありがとうございました。(Qats)

◆恥ずかしながら、ジェーン・オースティンの作品を一度も讀んだことがありませんでした。ドラマテ

ィックでなく、ロマンティックでもない淡々とした作品であるとのことでしたが、そのような作品が漱石・豊一郎・弥生子によってこれほど評価されていることを知り、いったいどのような作品なのか、非常に気になっています。帰りに書店に寄って翻訳版を見てみたいと思います。(小比賀有華利)

◆Jane Austen は私が大学時代に読んで興味を持ったイギリス女性作家です。当時シャーロットブロンテ(ブロンテ姉妹)より読みやすく、感情移入しやすかったのを覚えています。当時の気持ちを思い出し、とても懐かしく感じています。夏目漱石という日本の大文豪が1人の大学教員としても様々な人間に影響を与え続けていることが強く印象に残りました。ありがとうございました。(岩中妙子)

◆『高慢と偏見』という本は讀んだことがありませんでしたが、田村先生のお話を聞いてぜひ讀んでみたいと思いました。私もどちらかというと悪妻愚母ですので、ドラマチックな展開も虚飾もないもっとも平淡な物語に興味がわきました。(石原幸映)

◆作品研究がいろいろな研究者を通して、書名さえも変化していくのを興味深く拝聴しました。一つの疑問は、『高慢と偏見』の下巻の訳において、野上の訳を紛失したことにより平田の訳になったとはしきにありました。もし原本(野上による)の訳があったらどのようなものになったか、平田の訳を野上はどう評価したのか、気になるところです。(深澤清治)

◆漱石が Austen から小説の技法を学ぼうとした点の指摘がとても面白かったです。(YH)

◆野上弥生子、ジェーン・オースティン、『高慢と偏見』については雑多な知識はあるものの、作品を読んだことはなく、この度の講演できちんと読まなくてはならない作品だと感じました(『真知子』を含め)。資料がとても効果的で、田村先生が伝えようとしたこと、ライフワークとして真摯に取り組んで来られたことが、今はっきりと理解できたように思います。フンドーキンのドレッシングを使うたびに野上弥生子のことを考えますが、今回の講演のことを思い出したいと思います。ありがとうございました。

(水野康一)

◆田村道美先生のご講演は、はるか昔の大学時代の英文学の講義を受けているような心地よい気持ちで拝聴させていただきありがとうございました。新しい10ポンド紙幣も見せていただきありがとうございました。Jane Austenの*Pride and Prejudice*についても、漱石と豊一郎、そして弥生子の関係についてもよく知りませんでしたので、自分の教養不足が恥ずかしく思われました。これからでも読んでみようと思いました。

(安部規子)

◆漱石とJane Austenとの出会いのきっかけは何だったのでしょうか。渡英して購入した50余冊の中にたまたま入っていたのでしょうか。人をワクワクさせるような内容でないにもかかわらず高い評価を得ているという*Pride and Prejudice*、自分にはどう読めるのかと興味がわいてきました。(水谷明伸)

◆とても興味深く聞かせていただきました。Jane Austenに感銘を受けた夏目漱石が蒔いた種が様々な形で人々の心を動かし、素晴らしい翻訳や作品が生まれていったというお話に、文学の持つ力や教育の持つ力のすごさを感じました。Jane Austenや野上弥生子さんの小説を読みたいです。ありがとうございました。(高橋真弓)

◆Jane AustenやEmily Brontëなどは私が修士の頃に受けた文学の授業で取り上げられ、*Pride and Prejudice*も読んだ記憶があります。また近年キーラ・ナイトレイ主演で映画化されたことも思い出しました。しかし正直に言うと、まさか夏目漱石が関わっているとは全く知りませんでした。また当時様々な日本文学から高く評価されていたことを知り、新たに興味をひかれました。

◆作家や作品の受容史研究はこうあるべきであるということを教えていただいたように思います。穏やかなお話しぶりに、たいへん心地よく聴き入りました。まさに資料をもって語らせるご研究と感服しました。(KZ)

◆イギリスの中流家庭の様子がわかるだろうということで、英語教師6人がCam大卒の女史と読み始めたが、一方的に読み、猛烈なスピード、読みながらうなずき本人のみ納得。単語の説明のみ。3回目にみんな時間の無駄だと挫折。本日もいろいろの資料で補強されると理解ができた。感謝。

◆田村先生が豊富な資料に基づいて綿密に検証されているのに感心しました。また、松岡先生が言われたように、漱石の書いている日本語の難しさを実感しました。やはり漢学の素養がある当時の人はこんな文章を書いたのですね。(JH4DGW)

◆今日はありがとうございました。漱石・野上弥生子氏がJane Austenを高く評価し作品に反映させていたことを興味深くうかがいました。次はJane Austenの*Emma*を読みます。(竹中千鶴)

◆*Pride and Prejudice*を漱石、豊一郎、弥生子がそれぞれどう受け止めていたか、大変面白く聞かせていただきました。田村先生のお話は、まさに「味わい深い英文学講義」として心に残りました。ありがとうございました。(Horse)

講演②

「英学史・英語教育史研究に魅せられて」 竹中 龍範 (香川大学)



竹中先生はこの3月に香川大学を退官されるが、今回のご講演は先生ご自身が「最終講義」に代わるものと位置付けられたものである。お話はこの分野の研究を志されるきっかけとなった学部時代のエピソードに始まり、ご自身の研究生生活を振り返るかたちで進められた。話題とされたのは、支部の設立と運営、香川大学神原文庫の活用と運営への協力、『英文熟語集』の復刻、『英学史會報』・『英學史論叢』の編集といったことから、いずれについても貴重な資料を惜しみなくお示しくださった。日頃、先生のもとで研修を積まれている地元の先生方をはじめ、ご縁のある方々も多数参加され、ともに意義深い時を過ごすことができた。(河村和也 記)

【参加者の感想】

◆竹中先生の研究室にお伺いしていたとき、先生はホッチキスを取ろうと机の引き出しを開けられたことがありました。半ばまで引き出された幅 70 センチほどの引き出しの中に、様々な文具類が整然と整頓されているのに一驚を喫したことがありました。今回の先生のご講演の資料を拝見して、英学史・英語教育史研究との出会い、日本英学史学会広島支部の発足の経緯、香川大学附属図書館の神原文庫の意義と文庫との関わり、『英學史會報』『英學史叢論』の編集、日本英語教育史研究会の発足と日本英語教育史学会への改組・改称の経緯、兵庫教育大学大学院・広島大学大学院での集中講義、香川大学で開催された日本英学史学会全国大会・日本英語教育史学会全国大会での講演、日本英学史学会中国・四国支部長、日本英語教育史学会会長及び『英語年鑑』『英学史の研究』執筆担当となった経緯、そして研究分野等について見事なほどに簡潔に要領よくまとめられているのを拝見して、整然と整頓された先生の引き出しを思い出しました。さらに、先生のご講演を拝聴して、資料に記されている内容は実は先生の頭の中にすでに整理されたもので、それをそのまま写したものだとなり、先生の博覧強記ぶりと記憶の整理力に改めて脱帽いたしました。

今回の例会は竹中先生が実質的に最終講義となるご講演をされるとのことで、先生と関係の深い地元の高校の先生方や香川大学の先生方にも参加いただき、久しぶりに参加者の多い例会となりました。また、竹中先生のご講演はまさに最終講義にふさわしいもので、先生の英学史と英語教育史研究との長く深い関わりを改めて知ることができました。

(E. Woodhouse)

◆これまで 40 年間、英学史・英語教育史というライフワークにのめり込んだ、先生の歩みと活動を拝聴できました。その始まりが学部 3 年次後期 (1973 年)、(当時の) 松村幹男先生の「わが国における英語教育史レポート課題」のテーマのひとつであった「自らの出身地・出身高校における英学史、英語教育史をまとめる」に応えるレポートとして、「彦根藩の洋学について」広範なる資料調査と精緻をきわめた考察を行い、それをまとめ、それによって一歩先んじた成果を達成できたことを、翌 1974 年に知るに至り、それがその後、先生の今日まで 40 年間にわたり、広範でエネルギーな研究・教育・実践活動へとつながり、ますます展開していったことを知りました。諺に“As you sow, so shall you reap.”《Gal. 6: 7》とありますが、まさしくそのとおりだと肝銘を受けました。なお、もうひとつの大発見

は、先生の卒業・修士論文が発音指導にかかわるものであったということでした。といいますのは、これまでいろいろとやってきた(つमोरい)後、最後に越えなければならない峰が、発音・イントネーションであることにやっと気がつき始めたものですから…。お話、ありがとうございました。(Qats)

◆私の大学院生時代の記憶がよみがえり、時間を忘れるご講演でした。時々において、先達からの一言があったことが背中を押したような印象を受けました。今後、私たち教育に携わる者がどのようなことばをかけていくのか、何気ない一言が学生の一生を決めるような気がします。長い間の英学史・英語教育史研究、お疲れ様でした。(深澤清治)

◆竹中先生の英学史・英語教育史に関する長きに渡る研究について感銘を受けましたが、先生が間に話されるエピソードの方も非常に興味深く聞かせていただきました。紹介された書物を是非読んでみたいとおもいました。

◆竹中先生の英学研究の歴史は、本支部の歴史と重なる部分が多く、大変興味深かったです。昨今大学の教員も多忙なので、御退職後のさらなる研究発表を期待しています。(YH)

◆支部長の竹中龍範先生のご講演ということで初めて香川大学に行かせていただきました。竹中先生が学部生という若い時代に英学史・英語教育史に出会い、多くの偉大な先生方との知遇を得て、これまで大きなお仕事を積み上げられてきたことを知りました。日本英学史学会や中国・四国支部、さらに日本英語教育史学会の成り立ちについても理解することができました。最終講義のようなお気持ちで今回お話下さったとのことで、貴重なお話をありがとうございました。(安部規子)

◆この学会の生き字引であり、ルーツを一番よくご存じの竹中先生ならでの講演で、興味深く拝聴し、あっという間の 1 時間でした。先生が取り組むきっかけとなったのが学部 3 年次の授業だったとのことですが、私の学生時代にもあったらもっと早く英学史、英語教育史に取り組んでいたかもしれないと思いました。長年の先生の研究の幅の広さに驚くとともに、退官後は時間的に少しは余裕ができられると思いますので、いっそうの研究の発展をお祈りし、発表を通して我々をご指導いただきたいと思います。(JH4DGW)

◆竹中先生のご講演を拝聴させていただきました。普段の談話会ではあまり触れられる機会のない分野について、貴重なお話を伺えて、勉強になりました。今後ともよろしく願い申し上げます。

(餅 知隆)

◆竹中先生の教える生徒がなぜ三高に戻ってきて明治時代の英語教科書や定期テストの原本を調査しに来るのかわかりました。竹中先生も退職され私も三高を離れると誰も知らないところにそれらが存在するのか、もしかすると捨てられるかも知れません。

(水谷明伸)

◆先生の個人史をこのようなかたちでまとめて聞かせていただくのは初めてのことだと思います。さまざまな方との出会いと、その出会いを大切ににあためて歩んで来られたことを知りました。ありがとうございました。(KZ)

◆松村先生の課題が英学史との出会いであり、その後の竹中先生の英学史とのかかわりがそのまま、わが支部の歴史であると言っても過言ではないだろう。ご講演を拝聴していると、今は亡き支部を創設した若き恩師たちの熱い語らいが聴こえてくるようであった。そして、自分自身もいくつか共有できたことをうれしく感じました。(Rainbow)

◆香川大学に神原文庫が存在していたおかげで、竹中先生とお会いすることができたかと思うと、神原文庫に感謝しかありません。香川大学の一事務員の私をこのような会に参加させていただき本当にありがとうございました。(小比賀有華利)

◆竹中先生の40年以上にわたる英学史・英語教育史研究の歩みを、私たちの学会の歴史と重ねながら、一つ一つ丁寧にお聞かせくださいました。先生が積み重ねてこられたご業績を、この学会で後に続く者

として真剣に受け止め、次代に繋げていかなくてはならないと、決意を新たにしました。ありがとうございました。(Horse)

◆竹中先生の今までの歩み・試みがとても誠実で尊敬する気持ちを改めて強くいたしました。いつまでもご健康でいていただいて、私たちの心の励みとさせていただきたいと思います。これからもよろしくお願ひいたします。ありがとうございました。

(岩中妙子)

◆断片的にお聞きしたことのある話について、まとめて今回聞くことが出来たのは非常に有難く感じました。特に学会員ではないため、竹中先生の英学史・英語教育史研究(学会)との関わりについて新しい逸話も興味深かったです。松村先生、竹中先生との長年の交流がありながら、この分野に足を踏み入れてこなかったことは、私自身恥入っております。

(水野康一)

◆我々の会の源点～現在に至る本流の講話 会の輪郭が見えてきました。多謝。

◆とても興味深くお話を聞かせていただきました。英語教育の歴史の深奥の一端に触れて豊かな気持ちになりました。先生にはもっともっと教えていただきたいことが沢山あります。今後共どうぞよろしくお願い致します。昔の英語授業がどのようにされていたのか興味があります。研究発表される折には、教えていただけたら是非聞きに参りたいです。

(高橋真弓)

【研究例会全体について】

◆平成29年度第2回研究例会が、事務局・会場となった香川大学(教育学部)・ご参加の方々に支えられ、成功裏に、有意義に行われ、ひきつづき忘年懇親会(庄や高松駅前店にて)をもって、参加したよろこびを分かち合いました。ありがとうございました。(Qats)

◆大変お世話になりました。ありがとうございました。(YH)

◆懇親会はおおいに盛り上がり、楽しく過ごせました。高松駅構内といってもいい場所で、列車利用の者には好都合でした。お世話いただいた関係者の先生、ありがとうございました。(JH4DGW)

◆地元の先生方に多数ご参加いただき、にぎやかな例会となりました。田村先生、竹中先生、お二人のご講演を一度に拝聴することができ、贅沢な時間を過ごすことができました。素晴らしい会でした。

(Horse)

中国・四国支部ニュース

》》森 悟先生、日本英学史学会奨励賞を受賞

森 悟先生の『武信由太郎伝』(2016)に対し、平成29年度の日本英学史学会奨励賞が贈られました。心よりお祝い申し上げます。

》》年会費納入のお礼とお願ひ

すでに多数の会員の皆様より今年度の会費(一般

3,000円、学生2,000円)をご納入頂いております。ご協力に感謝申し上げます。これからお振込みの方は次の口座までよろしくお願い致します。

ゆうちょ銀行「振替払込用紙」を用いる場合

(口座番号) 01360-9-43877

(加入者名称) 日本英学史学会 中国・四国支部

他の金融機関から振込む場合

(店名) 一三九(イサキヤ)店(139)

(口座番号) 当座 0043877

(加入者名称) 日本英学史学会 中国・四国支部

>>『英學史論叢』第21号原稿募集

中国・四国支部研究紀要『英學史論叢』第21号の原稿を募集します(2018年5月発行予定)。

研究論考, 研究ノート, 英学史随想, 英学史時評, 書評等, 会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。特に今年度は支部発足40年の節目となりますので, 研究のご回想や支部活動への思いなどを「英学史随想」としてぜひお寄せください。

・投稿に際しては, ニューズレターNo.90ならびに支部ウェブサイトに掲載の「執筆要領」, 「標準書式」に従ってください。

・研究論考・研究ノートの原稿提出締切は, **2018年2月20日**(消印有効)です。正副計3部を事務局まで郵送してください。正本1部にのみ著者名を明記し, 副本2部には著者名を伏せてください。

・標準書式に則ったファイル(テンプレート)をご希望の方は, 事務局までお知らせください。

・英学史随想, 書評等は, 3月末日までに, 1部を事務局までお送りください。

>>平成29年度第2回理事会

2017年12月9日(土), 高松例会に先立って開催された理事会において, 今年度の活動報告および平成30年度活動計画について協議しました(出席者7名)。以下, 来年度の行事予定です。

・支部総会・第1回研究例会

平成30年5月26日(土) 広島市にて開催

・第2回研究例会

平成30年12月8日(土) 三原市にて開催

このほか, 支部運営について意見交換を行い, 次の点を確認しました。

・ニューズレターの発行については, 担当者の負担減につとめ, 内容や発行回数について引き続き検討する。

・印刷版(紙媒体)のニューズレター郵送事務を簡素化するため, 電子メールの受信が可能な会員については, 申し出があった場合にのみ郵送する。

平成30年度第1回(通算第78回)研究例会発表者募集

平成30年度第1回(通算78回)研究例会を, 2018年5月26日(土)に広島市内で開催の予定です。研究発表(持ち時間は質疑応答を含む70分程度*)を希望する会員は, (1)発表題目, (2)発表者氏名(所属), (3)発表概要(200字程度), (4)使用予定機器, 以上4点について明記の上, 事務局までお申込みください。

申し込み先 ・メール eigaku@tom.edisc.jp

・ファックス 0824-74-1724 (馬本研究室直通)

・郵送 〒727-0023 広島県庄原市七塚町5562 県立広島大学馬本研究室

申し込み受付期間: **2018年2月20日(火)～3月22日(木)**

* 申込者多数の場合は, 時間調整を行う場合がありますので, ご了承ください。

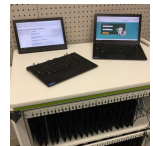
広島英学史の周辺(57) ▼寒波の到来がいつもより多く感じる今年の冬です。県北のキャンパスに勤めて16



年, 寒さには慣れっこになり, 雪景色を楽しむ余裕も出てきました。写真は食堂にある野外テーブルとベンチ。雪のマットの上に寝ころびたくなります。▼このキャンパスのCALL教室を拠点にいろいろな仕事を

をしています(ニューズレターの編集も)。今年度新しくなったCALL教室は, 写真のような部屋です。可動式, 折り畳み式の机と椅子。パソコンもノート型に変わりました。ICTを活用して英語を学ぶアクティブ・ラーニング教室は, もはやComputer Assisted Language Laboratoryとは呼びないかも知れません。▼この部屋で, 教える私たちが面白がりながら, インタラクションの新しい形を模索しています。ぜひ一度

お越しください。どんなに楽しんでいるか, いくらでもお話しできそうです。(馬)



日本英学史学会中国・四国支部ニューズレター No.91

2018年2月3日発行

発行 日本英学史学会中国・四国支部(代表 竹中 龍範)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町5562

県立広島大学 馬本研究室内

電話&FAX: 0824-74-1725 (研究室直通)

e-mail: eigaku@tom.edisc.jp

ホームページ <http://tom.edisc.jp/eigaku/>

郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部

Newsletter No.91 February 3, 2018